武蔵野日曜聖書講筵

安息

――創世記第２章１～３節――

１９７５年１月19日
小池辰雄

創造の第七日目　キリストの復活の日　静中の動　幕屋の「中高生会」　１月19日は母の命日
「勝利者の墓」　キリストの中に安息

【創世記２】

（文語訳）

1斯天地および其衆群悉く成りぬ　2第七日に神　其造りたる工を竣たまえり　即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまえり　3神　七日を祝して之を神聖めたまえり　其は神　其創造為したまえる工を　尽く竣て是日に安息たまいたればなり

（口語訳）

1こうして天と地と、その万象とが完成した。2神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。3神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。

●創造の第七日目

創世記の１章の１節から５節を第一回にして、第三回は１章27節。まぁ１章27節はまだこれ語り足りないんですけれども、しょうがないです。今日は２章の２節、３節。

1こうして天と地と、その万象とが完成した。2神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。3神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。

そういうわけで、この「安息日」というのが第七日目に定められる。これは創世記第１章の１節から２章の３節前半までは――ヘブライ語でいいまして、学者が言うところの――「祭司典」、「P」、「プリースター・コーデックス」（Priester Kodex）というんですが、その資料の中に属するもので、かなり後代の紀前５世紀位の整った、坊さんの祭司宗教の、特色がよく表われているというわけです。

とにかく、この神話において六日間神さまは創造のわざをして、七日目に休んで、これを聖別して、祝福すると書いてあるでしょ、第七日目を祝福すると。祝いの気持があるわけです。ある意味においていうと、七日目毎が祭日なわけですね、ユダヤ人にとっては。

「聖別する」という字は「ウェカデーシュ」と、非常に強く書いてある。強い言葉で、強い表現になっている。特にこの「聖別する」というのは、「カードーシュ」というのは、

「聖なるかな、聖なるかな、……万軍のエホバ」

という、あの「聖なる」という字と同じ字です。

少し、安息日の記事を聖書によって見る必要があろうと思う。「休む」という字はヘブライ語で「シャーバット」という字です。それから「シャッバート」という名詞になります。この「シャッバート」という言葉の他にまだ「休む」という字がありますが、それは今はよしておきましょう。

出エジプト記の、Pの記事でいうと、31章の12節から17節まで。

「12 **エホバ、モーセに告げて言いたまいけるは**

これはモーセとなると「契約」ですから、安息日というのは契約の一つの大事なその内容であるというように言われるわけです。

13 **汝イスラエルの子孫に告げて言うべし 汝等かならず吾安息日を守るべし 是は我と汝等の間の代々の徴にして 汝等に我の汝等を聖からしむるエホバなるを知らしむる為の者なればなり**

ただ、人間は六日働いて七日目に休むという、人間中心の考えではなくして、神さまの業の祝福の、

「祝福の日、また聖なるものとしてこれを分かつ」

という角度からこれを守れというんです。

14 **即ち汝等安息日を守るべし 是は汝等に聖日なればなり 凡て之を瀆す者は必ず殺さるべし**

と非常に強いことが書いてある。

凡てその日に働作をなす人はその民の中より絶たるべし

こういう強いことが書いてあるので、今でも安息日にはユダヤ人は何もしないわけです。ユダヤ人が安息日に何もしないというので、マカビ時代のあの戦争で、安息日にシリアの軍隊が攻撃して来た。しかし、それに応戦するよりも安息日を守って殺される方が名誉であるというようなことが、マカビ書に出てくる。それくらいにユダヤ人は、律法に対しては死をもって守るというようなところがあるわけです。

15 **六日の間業をなすべし 第七日は大安息にしてエホバに聖なり 凡て安息日に働作をなす者は必ず殺さるべし**

とまた書いてある。

16斯イスラエルの子孫は安息日を守り代々安息日を祝うべし 是永遠の契約なり

即ち契約の一つの徴だというんです、安息日というのは。そして、聖別すると。

17是は永久に我とイスラエルの子孫の間の徴たるなり 其はエホバ六日の中に天地をつくりて七日に休みて安息に入りたまいたればなり」（出エジプト31・12～17）

それで要するに、礼拝にたずさわらなくてはいかんと、非常にはっきりしているんです。

●キリストの復活の日

それから、申命記の5章14節。これは例のモーセの十誡ところです。これはそんなに詳しくは書いてない。旧約で安息日のところを取り出したら、まだまだたくさんあるけれども、一々当たるわけにいきません。

「14**七日は汝の神エホバ〔に対して〕の安息なれば**

ここのところは十誡のことが出てるでしょ、6節からずうっと十誡のことです。

何の業務をも為すべからず 汝も汝の男子女子も汝の僕 婢も汝の牛驢馬も汝の諸の家畜も汝の門の中におる他国の人も然り 斯なんじ僕婢をして汝とおなじく息ましむべし 15汝誌ゆべし 汝かつてエジプトの地に奴隷たりしに汝の神エホバ強き手と伸べたる腕とをもて其処より汝を導き出したまえり 是をもて汝の神エホバなんじに安息日を守れと命じたもうなり」（申命記5・14～15）

出エジプトと関連して、安息日を守るという。ちょっと受けとれないような文句があるわけです。ということは、

「それほどの恵みにあずかったんだから、七日目ごとにこれをその意味においても覚えて守れ」

ということらしい。「恵みを誌える」という。ですから、申命記の方になると、モーセの十誡の中に出てきて、契約の徴で、しかもそれはモーセの十誡は出エジプトという恵みの行為の後で契約を結んだときの十の言であるから、安息日にはやはりその恵みを覚えろと、こういうことのようですね。同じ主旨のことが出エジプト記23章12節に出てますが、いいでしょう、いちいちお開きにならなくても。

それから、安息日というのがよく「新月」と一緒に出てくる。預言者が特にそのことをちょこちょこ言っている。アモス書の8章5節。

「4**汝ら喘ぎて貧しき者に迫り且地の困難者を滅す者よ 之を聴け 5汝らは言う 月朔は何時過ぎ去らんか 我等穀物を売らんとす 安息日は何時過ぎ去らんか 我ら麦倉を開かんとす**

安息日には出来ないものだからね、

我らエパを小さくし シケルを大きくし 偽（にせ）の権衡（はかり）をもて欺く事をなし云々」

この「月朔（ついたち）」というのが「新月」のことなんです。月の始め、1日と15日。月が15日毎に変って、満ちては欠けていくでしょ。特に7月の1日が1月ですから、バビロニヤの暦に従うと、そういうことになって、それをまた踏襲した面があるわけです。だから、7月1日は特に新月の一番主なもので、この新月と安息日。二つの安息日で14日、そして新月が大体二週間ごとにやってくる。太陰暦ですね。そちらの方とかなり関係を持っている。それは家畜のことと、農業のことです。やはりそういった月の満ち干ということと関連をもって考えていた、というようなことを言う人もありますけれども。

それで事実、そういうようにごっちゃになった面があるので、預言者たちがこうやって上げているけれども。本来の安息日というものは、神の創造の最後の安息という、そういった聖別の意味。やはりそれが本筋であるというように見ていいわけです。そういう安息というものは、ユダヤ人は、そういった意味において、守りまた礼拝と非常に関係したものとしている、ということはユダヤの宗教の本筋ですから、非常に大事な意味を持っている。

「聖日」というわけです。聖なるもの、そこでこれに安息（やす）らう、そしてそれは祝福の日である。ですから、この創世記2章の2節、3節の所が一番、根本的な性格が表われているわけです。それが実際、守られだしたのはやっぱりモーセの十誡の以後ということは、それは確かです。

イスラエルのそういった創造の話と、今度はキリスト教の日曜日、安息日、これはやっぱりズレが来ている。キリスト教に於ては、福音に於ては、キリストの復活の日、即ちキリストの甦りの日です。「復活の日」という。

●静中の動

今年は非常に復活節は早く来る。3月30日。3月22日以後の満月の次の日曜日という。ユダヤ人は、金曜日の夕方から土曜日の夕方までが安息日。キリスト教に於ては、金曜日にキリストが十字架にかかったので、その三日目の甦りということで、一日ずれたところが安息日。けれども、我々、キリスト教でも、これを「安息日」と言って、「復活日」とは言わないわけです。安息日という。だから、ユダヤ教の観念と、またその言い方は踏襲しているわけです。

我々クリスチャンとしてはもちろん、このユダヤ的な旧約のしきたりを単に旧約的な意味でもって守るのではもちろんない。もちろんその意味もありますけれども。我々の六日間の働きというものも、神に於て働く。自分でもっていわゆる自主的な人間本位的な意味における労働ではない。いわゆる民主主義的な意味の労働ではなくて、働き給う神と共に働く。

「神は今日も明日も働き給う。自分も神と共に働く」

とキリストが言われた。我々の労働の自覚は、神の業に、神の働きに、神の創造の業に、

常に新たに参与していく。創造があれば完成がある。もちろん、天地の創造は一応それで「善し」と神さまは言われて、ある意味における全さは来ているけれども。創造における神の業の全さというものは、質に於ては全いけれども、まだ内容に於て本当の完成には来ていない。

その内容に於て本当に完成に来るのは、「新天新地」の最後の終末のときに来る完成です。そこに「始め」の中に既に「終り」の質はある。アルファにしてオメガなるものがある。創造がアルファであり、最後に神さまの業としてオメガ（完成）の最後のときが来る。これが神の歴史です。始めあれば終りありという。新天新地が最後に来たときの完成の時が、神さまの大きな歴史における安息の時である。最後に本当の安息が来る。

その本当の安息の予表として、我々の生活の中に、神の創造の業に六日間参与して、七日目に完成して休むという、この一週間の旅路は神さまの歴史、神の大きな歴史の一つの縮図であると、考えていいわけです。だから、これを聖別しこれを祝福する。我々の旅路はその一週間がグルグル繰り返されている。ということは、今度はこの安息、神さまの中に私たちが安らうということは、神の中に安らうということは、また神の真理の中に自分を入れていくということ。

聖書を学ぶということは、力を獲る。本当の生命の光。光とか、力とか、愛とか、要するにそういった一番、人間の根源的な本質的な、あるいはある意味においては、完成の質をそこに備えた在り方へ自分を持っていっては展開していく。というのが、我々が自覚すべき安息の本当の意味だと思います。

だから、日曜日は、私たちはその意味において守る。神の中に、キリストの中に本当に安らう。キリストの中に安らうということは、キリストの力を本当に受けとる。安息日を本当にその意味において受けとっていかなければ、本当の前進はないわけです。安息日をいい加減にしていれば、大体、信仰がおかしくなると言っても過言でない。そうかといって、安息日をただ

「守れ、守れ、守らなかったら殺すぞ」

なんていうような角度の意味で律法的に守ったってダメですよ。キリストが、

「安息日にも我は主たるなり」

と言われた。安息日に於ても主である。

「人を助けて、なぜ悪いか」

と。キリストは安息日にも愛の業をなした。だから、ユダヤ人にキリストは、

「安息日を破るけしからん野郎だ」

というので、いろんな律法的な角度からキリストはどうしたって理解されないわけです。私たちもユダヤ的な意味におけるところのただ休息して何もしない、なんていうのではなくて、もちろん深く――聖日の集会はその意味において受けとっていきますけれども――

しかし、聖日の中で、ある時に人を助けなければならない時があれば、それは助ける。伝道もする。そこはどこまでも、「主の日」ということ。今度は復活の生命のキリストの甦りのキリストの生命と共に、そのような神に祝福された神の業をしていくことは差し支えない。また、すべきものであるというわけです。そうなるというと、

「安息日がなくなってしまうじゃないか」

と。でもしかし、そこが申し上げているとおり、「静中の動」ということです。安息日は神の中に静かに安らうが、その中には動がある。その静が動に発動しなければならない時は発動する。どこまでも、安息日は静です。けれども、それが動に発動する時には、動に発動する。何となれば、この静は力を得んがための静である。

そういう安息は、別な言葉でいうと、「平安」という「平安日」なんだ。キリストの中に安らうことは本当の平安の世界。平安の世界が平和ならしむるものですから。

「幸いなるかな、平和ならしむる者、人を助くる者」

と。そういう意味において、私たちは安息日に対しては非常に――それをキリスト中心の主体といいます――キリスト中心の主体的な在り方。キリスト抜きの主体ではないですよ。キリスト中心の主体的な在り方が安息日なんです。どこまでも中心はキリストです。キリストの中に安らうことなしに、ただ働いたって、これはいかん。そんなことをすれば、いわゆる人間的な働きになってしまう。

内村先生あたりは、あの“How I became a Christian.”（余は如何にして基督信者となりし乎）の中にも出ているけれども、あの農学校の人たちは安息日を厳守した。私もとにかくキリスト教に入ってからは、翌日試験があっても、安息日には勉強しない。その代り月曜日の朝3時頃に起きてやったことは、それはありますよ。けれども、安息日にはとにかく学校のことはやらん。

●幕屋の「中高生会」

話はまたずれるけれども、手島さんの所の中学生、高等学校生が「中高生会」というのを毎土曜日に開いている。凄いよ、とにかく。昨日は僕に話して来てくれというわけです。手島さんの息子の勲矢（いざや）君というのが獨協にいるものだから、こないだ校長室に入ってきて、何かと思ったら、

「話してください」

と言うから、

「じゃあ、行くよ」

と。それで昨日は4時半から話をした。湘南地方からもやって来る。40人ばかり、それが不思議なことに男の子と女の子が大体同じ数です。吉村君の所の部屋を二つぶっ通して畳の部屋です。それで、これはみんな幕屋結婚です。幕屋結婚の第二世です。だから、とに

かく本当に信仰に燃えているね。もう目玉を見ても、顔を見ても分る。明るいです、非常に。僕の話の前に勲矢君が司会してたけれども、

「三人ほど証言してください」

と。そうすると三人代わり番こに立って話をした。驚いたね、私は。もうあなた方、ボヤボヤしてたらあれに負けるよ（笑）。

「私は学校で野球してますけれども、どうもバットに球が当たらない。それから、祈ることにした。運動でも祈る。バッターの所に立って、『神さま、どうぞ……』と心の中で祈った。それから当たりだした。今はむしろホームラン王だ。今まで三振王だったのが、今ではホームラン王。まぁホームランばっかりというわけではないけれども、非常に当たるようになってしまった」

なんていう証言をやっている人もあるしね。そうかと思うと、今度は勉強の方の――今のは運動の方だけれども――勉強の方でも、

「とにかく、朝祈るようになったら変ってきた、学校に行ってものの理解が。それで成績がグングン上ってきた」

という。それからまた、ある人は、

「お母さんが亡くなってしまった。次のお母さんがやってきた。その結婚式に行ったけれども、どんな人かなぁと思っていたところが、そのお母さんが本当に素晴らしい人なので、本当に私は感謝している。とにかくニコニコしていて非常に家中が明るくなってしまった」

と。そういうことで、とにかく彼らは本当に生きている。まずその讃美歌の声がはっきりと力強いしね。これが中学校・高等学校の生徒たちですよ。普通の中学生・高等学校生では考えられない。そのようなことで、本当に実証する。

それで、私は――前にここでお話したこともありますけれども――「一者」の話をした。世界の歴史をそこで動かしているものはみな「一者」である。先程のルッターにしてもそうです。大体、アブラハムからしてそうです。アブラハムが天使との語らいで、

「ソドムにもし50人の義しい人があったら、神さま、ソドムを赦してくれますか。もし、45人だったらどうですか」

と。創世記の18章に出ている。最後は10人まできた。

「その先は書いてないけれども、その先になお余韻があるんだよ、分るかね？　その10人の先の答案が別な所にある。誰かわかるか？」

なんて私は言ったら、これはさすがに分からなかった。エレミヤ記の５章１節に、

「エルサレムにもし公義を行い真実を求むる者が一人でもあれば、エルサレムを赦す」

という言葉がある。即ち、神さまは最後に、

「たった一人であっても、本当に神と共に、神の中に生きている人があったらば、真理を生きている者があったら、エルサレムを赦す」

と仰った。あなた方一人びとりはそれだけの重みがある。

「全世界を得るともその生命を失わば、何の益かあらん」

とキリストが言われた。一人、一個の価値は全世界より以上だ。これは普通の論理では成り立たないけれども。我々が神さまに顧みられているということは、そのような一人びとりであるということ。

「何をしたか」

ではない。

「いかにあるか」

ということが、東京を背負い、世界を背負うような、それだけの重みを持っている。私たちにかかっている。人間が真に人格ということは、人格の極みはそこにある。そして、一者、一事。一つの事に打ち込む。

「一日一生」

とは内村先生の言葉です。一日本当に生きれば、百年いい加減に生きたよりか本当にその人は生きている。何となれば一日において永遠を生きているからだ。

私は力強くいろんな事を語った。もう彼らは非常に感激しちゃって、終りには涙ながらの祈りをしている。そして私が帰るとなったら、みんな握手しにやってきて、40人に握手されたら、手が痛くなってしまった。そういう連中ですよ。本当に喜んで、帰りを惜しむわけだ。今の一般の教育ではそのような魂の教育はなされていませんから。それで、毎週やっているという。

「今度、先生、西の方の大阪でもやってますから、来てください。行ってやってください」

なんてなわけです。これは皆、幕屋結婚で出来ている家庭の子供たちです。やはり本当に彼らは信仰一点張り。しかも、その信仰が本当に愛に満ちている。まぁ話はちょっとズレちゃったけれども。

私たちの安息というのは、このキリストの生命の中に深く入って、もうじっとしていられないです、安息日も。我々はそのような日曜日を受けとって、語るも聞くも同じことの世界に入っているわけです。

コリント前書の16章、

「1**聖徒たちの為にする寄附の事に就きては、汝らも我がガラテヤの諸教会に命ぜしごとくせよ。**2**一週**（ひとまわり）**の首**（はじめ）**の日ごとに、各人その得る所にしたがいて己が家に貯え置け、これ我が到らんとき始めて寄附を集むる事なからん為なり。」（コリント前16・1～2）

「一週の首の日」と書いてある。新約聖書では安息日のことはあまり出てないね。使徒行伝の20章7節、

「7 一週の首の日われらパンを擘かんとて集りしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半まで語り続けたり。」（使徒行伝20・7）

と。有名なあそこですね、三階から落ちてしまったなんていう。

旧約における安息の意味を私たちはなおキリストの内容をもって満たしていけば、我々は本当の安息日を――まぁ私ももちろん休んだこともありますけれども――大体において１９４０年の９月から今日まで続けているわけです。死に至るまで続けるだろうと思ってますけれども。

昨日も言ってたよ。ある子供は私の話をどうしても聞きたいと思った。ところが、あいにくその子供は柔道のチャンピオンなんだ。柔道の大会があるので出なくてはならない。そうすると、私の話が聞けない。困った、困ったと思っていた。昨日の前の前の日、急に風邪をひいて熱を出した。それで柔道ができない。

「今少し熱があるけれどもこっちに来ました。これは神さまが助けてくれた」

なんて言って（笑）。そういうのがありました。……とにかく、いろんな人がいます。そして皆、本当に御霊の生命の喜びをもってたずさわっている。何をやっていても。やはり何のかんの言っても、彼らの実存には非常に素晴らしいものがあります。まぁそういうことを一つの参考にお話をしたわけですけれども。

●1月19日は母の命日

今日は実は私はもう一つ言いたいことがある。1月19日というのは、私には忘れることのできない日なんです。これは母の命日なんです。１９５７年ですから、何年たつかね。もう18年たちましたかね。……

母はなにもいわゆる信仰者ではなかったけれども、母を生かしていた一つの根本的な精神は――正に私は母から聞いたです――母は私に時々言いました、

「精神一到何事か成らざらん」

という言葉を。前に書いたことがあるから、もう皆さん大体の人は御存知ですけれども。17歳の時に母は、

「江戸に出て勉強したい」

と父母に言ったら、

「若い娘が一人で行ってはいかん」

と言って、お父さんお母さんは聞かなかった。とうとう、夜逃げしてしまった。松代から小諸まで来た時に、二人力の人力車で追いかけられて、小諸で取捕まってしまった。「帰れ」というわけです。

「もし、私に帰れと仰るなら、私の首を持って行ってください！」

と。これには追手がびっくりして参ってしまった。

「それでは行きなさい」

と言って、路銀をなお加えてくれたという話。これは母から直に聞いたから、嘘ではない。そういうことで、江戸に出て来て勉強したわけですね。とにかく、

「精神一到何事か成らざらん」

と正直、非常に苦難にあった。父は早く亡くなって、五人の子供を育てて――六人です、本当は――けれども、段々少なくなりましたけれども。

一番優秀な兄貴が北京でぶっ仆れた。これには参ったですね。本当はロンドンに行くはずだったんですけれども。これが北京で腸チフスで仆れた。母は今までの過労とその悲歎、心痛とで失明してしまった。

あの時の私は、ヘタすればどうかなっちゃうかと思うくらいに辛かったです。もちろん夜なんか眠れない。兄貴は仆れてしまうし、母は失明しますし、家はたたんでしまうし、叔父さんの所へやっかいになると、こういう始末です。

私はこんなしょうがない野郎だけれども、昔から二宮尊徳も、バッハも、大体、小さい時に片親を亡くなした人に、両親を亡くなした人に立志伝中の人が多いね。勝海舟もそうです。患難、涙を通して突撃していく。この世の生活ですべてが順調に行ったら、まずなかなか偉い人は出てこない。

偉い人というのは大抵――まぁ偉いという言葉がおかしいけれども――とにかく一生をかけて仕事をやり抜くような人は、何かみな患難にでっくわす。ベートーヴェン、ミルトン、みなそうです。いわゆる第一級の人でなくても、いろんな患難に遭えばあうほど、あるいは自分の失敗を重ねれば重ねるほど逆に、盛り上がってくる。

そういう意味において、私は自分の母と兄貴は私の今日ある本当の恩人です。その恩に対して私は申し訳けないような野郎ですが、しかし、大器じゃないけれども、これからが私の本番の勝負だと思っておりますから。どんなことがあっても、

「何をか！」

というものが湧いてくる。これはキリストの御霊の力です。ありがたいです。

皆さんも、これからいろんな事にお遭いになるか知らんけれども、あなた方若い方はやれ就職問題だ、やれ結婚問題だといろいろゴタゴタ有るようだけれども、そんなことでもって人間的にゴタゴタしてはいかんですよ。どしどし突撃していく。そしてやはりキリスト中心に、もう

「主さま！」

ということ。

昨日もその「一者」の話をしながら、もちろん私はこれを書いたんだ。「一者」の本当の

姿は
「神―キリスト―我」
というものが一つになっている。こういう一者だよと。この「一如」という姿。この「如」
という字は「ごとし」という意味ではない。「一つの如く」ではない。この「如」という字はもっと現実的なことを言っている。「如」という字は「ごとし」と読むけれども、いわゆる「如し」ではないです、「一如」の如は。
「一なる現」
なんです。だから、「如実」なんていう。うつつです。そういう「一」の事態です。

●「勝利者の墓」

私の母も夫を早く亡くなして一人で戦いました。五人の子供を育てあげた。これはあの“The Conquerors Grave”（勝利者の墓）という詩がある。これは、ある一人の女性が患難を通して信仰を貫いた。ブライアントの詩です。母の告別の辞のところに引用してある。私の録音の第一号がこの母の告別式なんです。あの時から録音が始まった。

Her glory is not of this shadowy state
Glory that with the fleeting season dies;
But when she entered at the sapphire gate
What joy was radiant in celestial eyes!
How heaven's bright depths with sounding welcomes rung
And flowers of heaven by shining hands were flung!

彼女の栄光は此の影の国土の属には非ず、
流るる時の推移につれて亡び去る栄光に非ず、
彼女、碧玉の門を入りしとき
如何なる喜悦やその天つ瞳には輝きし！
輝く天の真洞は歓び迎へて如何にとよみし、
また天上の花は花英をひらめかせて如何に
舞ひしか！

And He who long before
Pain scorn and sorrow bore
The Mighty Sufferer with aspect sweet
Smiled on the timid stranger from his seat;
He who returning glorious from the grave
Dragged Death disarmed in chains a crouching slave.

而して彼、その昔
痛苦と侮蔑と悲哀とを負ひ給ひし彼、
かの力強き受難の人は、輝しき聖顔もて
御座よりこのかよわき旅人に微笑み給ひぬ。
彼こそは栄光の中、墓より還り、
「死」の釼を奪ひ鎖に繋ぎて、そを奴隷と
せし者ぞ。

〔註：ウイリアム・カレン・ブライアント（William Cullen Bryant 1794～1878）は帆船メイフラワー号で「新世界」に新天地開拓のため移住して来た清教徒をその祖先に有つと云はれる。〔訳者（小池辰雄）当時の附記〕「愛に満ち優しく奥ゆかしき女性が、此の世の荒波の中を、神に順い、人のために傷ついて、従順と愛の生涯を全うするとき、これにもまして美しきものありとは考えられない、これよりも大いなる勝利ありとも想えない。」小池辰雄著作集第８巻『詩歌集』より〕

「彼女の栄えはこの世の陰の国のものではない。
時の流れにつれて滅び去る栄えではない。
彼女、〔天界の〕碧玉の門に突入したとき、
どんな喜びがその天つ瞳に輝いたろう。
天の渕は喜びに輝き、どんなにどよもし迎えたか。
天の花はてもあでやかにどんなに舞い踊ったか。
しかも、彼〔キリスト〕その昔、痛苦と侮辱と悲哀とを荷なった彼、
あの強い受難のひとは、
甘美な聖顔で聖座からこのか弱い旅人にほほえんだ。
彼こそは栄えのうち墓から帰り、
死の剣を奪って鎖につなぎ、
これを奴隷としたひとである。」

そういうキリストに迎えられた。そして、

「彼女は一人で戦った」

という句が前の方にあるんです。やはりこれも一人なんです。

要するに、今の民主主義は衆を頼んで、個人がいい加減な個人がたくさんだ。けれども、そんなもんじゃない。もちろん我々、「実存共同体」ということは大事です。しかし、実存共同体の一人びとりが本当の「一者」でなければダメだという。

「本当の一者である」

ということは単に孤独であることをただ好むということじゃないですよ。「単独者」というものは孤独者ではない。本当の単独者はキリストと一つになっている単独者。そういう単独者が本当の群をなす。本当の実存共同体がある。一人びとりが一騎当千の者である。あのギデオンの三百の勇士と同じように。福音の世界は男でも、女でも、本当の底力を持ってなければダメです。私は現象を言うのではない。本当の底力です。……

●キリストの中に安息

安息は、私たちはただ安息日ばかりでなくて、普段の時もキリストの中にいつも安息し

ている。そうすると、いわゆる肉体的な疲れは人間ですからありますけれども、精神的に魂が参ってしまうようなことはない。まぁ時々、癪にさわることに出くわすよ、僕だって。けれども、どっこい、もう一つこちらは次元の高いところに入ってしまうと、

「ああ、気の毒だ」

と思う、相手に対してね。そういうことで、本当に無敵ですよ。敵が無い。本当にキリストにある者は「無敵艦隊」です。Invincible Armada（インヴィシブル アーマーダ）というが、インヴィシブル、「敵が敵ならず」というわけだ。即ち、いつもこちらがもう一つ上に次元の違った所に居るか。もう一つ下に出て、荷なっているか。包むためには、上にいなければ包めない。

「包摂と荷い」

とはそういうことなんだ。上にいると、全部これを包んでしまう。今度は、下にいると、これを全部荷なってしまう。包摂と荷いというのはそういう方向を持っているわけだ。一切を包摂するというのは、次元が高い所にいるから、一切を包摂してしまう。今度は、もう一つ低いどん底に立つから、一切を荷なってしまう。これは同じことですよ。

本当にそういう気持になるでしょうね、あなた方？　えっ？　ならなかったらウソだよ。まぁ若いからね、なかなか難しいところもあるかも知れないが（笑）。まぁ私くらいな年配になれば、そこはかなり楽な気持が出てくるけれども。しかし、若くてそこまで行けないことはない。そのためにはいつも自分が本当の平伏しでなければいかん。もうはっきりしている。キリストの前に本当に平伏していなければ、キリストと一つになれない。

そういうわけで、まぁ何とも言えないですね。話はあちらにズレたり、こちらにズレたり、私のはするわけですが。

それで、ちょうど1月19日が、今日が日曜日になって、母のことを思っていると、これは言葉にならない。本当に奮闘しましたから。いつか何とかいう雑誌に出たね、「立志伝中の婦人」ということで。昔のあの雑誌は何という雑誌だったかな、「主婦の友」じゃないかな、何かそんなような雑誌。

どうぞ、この「安息」ということで、決して

「安息日のうちに力がある」

ということを忘れないように。そしてこの安息日は、キリストの中に、聖書の中に、私たちは没入するわけだけれども、今度は毎日の中でも、静中の動、動中の静というやつをいつも持つ。要するに、七日を、毎日毎日が七日を適当に――適当と言ってはおかしいが――集約して生きているわけだ。もう御霊の霊止（ひと）となると、何でも真理がどうにでも弾力性をもって生きてくることになるわけです。そんなことで、

「わが荷は軽し、わが中に安らえ」

と、キリストが言われた。重荷と思ったら、実は重荷でなかった。キリストのみ腕の、とこしえの腕の力がある。だから、患難が患難でなくなってくる。パウロみたいなのがあれ

だけの物凄い力を持ったのは、全くキリストの中に安らっている魂だったから。

こういうふうになると、まぁ仏教でもそれは偉大なのがあるけれども。一粒の光、一粒の麦という。これは聖霊だもの。だから、塵はあれども無きが如くになってしまう。みな物凄い爆発力を持ってくださいよ。爆発力は上から来て、それから爆発するんだから。自分で力んで爆発するのではない。努力もそうです。追求してやまない、というものも上からキリストが来て、力があるから、いよいよ追求して止まないわけです。普通の努力精進とはちがう。

「力が来たから、もうおしまい」

なんていうものではない。転開して止まない。そしてそのために大事なのは、正直、祈りです。ルッターさんもよく祈った、一時間、二時間と。

「そうすると仕事ははもう半分出来たと同じことだ」

という。

電車の中で本が読めない時は、目をつぶっていれば祈りの世界に入るから、混んでいる電車でも、

「あっ混んでた。しめたもんだ、ここで祈ろう」

てなわけでね（笑）。そういう弾力性のある魂にならなくては。そうしたら、隣の人が何か霊感を感じてしまうかも知れないね、ぶったおれてしまうかも知れない。まぁそれは少し冗談ですけれども。それくらいに、隣の人に霊的波動が伝わるように、知らないまに、

「今日はちょっとおかしいなぁ」

なんて、隣の人が思うくらいに。

まぁ、母のことをここに書いてあるのは、ここで今お読みする必要もないけれども。そんなわけで私としては、今日は母を思わざるを得ない。そんなことでお終いにさせていただきます。

讃美歌87Ｂ番「めぐみのひかりはわがゆきなやむ」を歌いましょう。これは母の好きな歌でした。